

中学校進学前の不安に関する記述データによる研究 小学校6年生時の記述と中学校1年生時の回想 との比較

著者	中島 義実, 大西 彩子, 原田 克巳
雑誌名	甲南大学紀要. 文学編
巻	173
ページ	145-150
発行年	2023-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00004450

中学校進学前の不安に関する 記述データによる研究

——小学校6年生時の記述と中学校1年生時の回想との比較——

中 島 義 実¹⁾

大 西 彩 子²⁾

原 田 克 巳³⁾

要旨：中学校進学前の不安について、小学校6年生時の不安と中学校1年生が回想した不安の記述データを対象に、KH Coder 3を用いたテキストマイニングにより検出した共起ネットワークによる検討を行った。小学校6年生時点の頻出語が必ずしも深刻な内容であるとは限らないとみられた一方、「違う小学校から進学してくる同級生との関係性」や「小学校で仲の良かった友人と違うクラスになってしまうこと」への不安、また中学校に進学して感じる雰囲気の厳しさなどに対しては予防的支援の視点が重要であり、「勉強についていけるか」「友達ができるか」「部活動の先輩との上下関係をうまくこなせるか」といった「定番」の不安への組織的な予防的支援があるとよいことが示唆された。「遅刻」については小学校段階で克服しておく方がよく、「給食が多くなる」「教科が増える」「敬語をうまく使わないといけない」といった事象は進学後に直面する前に予防的支援を要するとみられた。また個人に即した細やかな理解と配慮、支援が必要な事項も見出された。

Key Words: 中1ギャップ, 不安, テキストマイニング, 共起ネットワーク, 予防的支援

問題と目的

「中1ギャップ」という用語を目にするようになって久しい。佐藤(2017)は「小学校から中学校への進学(移行)期に、学校不適應をうったえる子どもたちが増加傾向にある」とし、文部科学省の学校基本調査における不登校児童生徒数の中学校での増加幅の大きさを指摘する。門原ら(2020)も「中1ギャップ」の問題は同省の「生徒指導上の諸問題に関する調査」で「はっきりと確認できる課題である」と指摘している。

他方でこの「中1ギャップ」という用語についての学術的な定義はなされておらず、中学校進学前の不安から進学後のリアリティショック、そして不適應状態に至るまで、指す範囲は様々であり、文部科学省も2016年より『「中1ギャップ」の真実』と題したパンフレットのシリーズを配布し、この用語について「慎重であるべき」としている(国立教育政策研究所生徒

指導・進路指導研究センター, 2016)。しかしながら、その後も前掲の佐藤(2017)や門原ら(2020)等が「中1ギャップ」をキーワードとし、その「解消」や「予防」のための「小中連携」の試みを重ねているように、学校現場においては何らかに実感され、課題となっている。

そのような「中1ギャップ」の諸相の中で、小学校から中学校への進学にともなう不安をめぐる研究には実証的蓄積があり、小泉(1995)、澤田・古川(1996)、草野・上地(2002)等により「期待と不安」の総体を測定する尺度の開発と検討がなされてきた。それらを踏まえ、南ら(2011)が開発した「中学校生活予期不安尺度」により進学前の不安の定量的測定法が提案され、佐々木(2014)による宿泊行事の効果研究や松下・今城(2016)による友人関係や学級適應感との関連の検討に用いられたり、千島・茂呂(2019)による集団宿泊活動の効果研究における更なる尺度開発を促したりした。

1) 福岡教育大学教育学部教授

2) 甲南大学文学部教授

3) 金沢大学人間社会研究域准教授

しかし南ら(2011)や千島ら(2019)の尺度はあくまでも定量的測定を主眼とした信頼性の高い因子構造を追究したものであり、計量性に優れている反面、進学前の不安の内容については「社会・文化的不安」「対人的不安」(南ら, 2011), 「学業への不安」「友人関係への不安」(千島ら, 2019)のように大きくまとめた形で捉えざるを得ない。

このような事情もあってであろうか、この間も、たとえば「中1ギャップ」を鍵概念とした富家・宮前(2009), 中村ら(2016)等のように子どもたちが直面する具体的な事項の細目を、記述データを基に検討する試みも続けられている。教育現場における指導や支援を考える時には、この視点も欠かせないからであろう。特に富家ら(2009)は小中学校の教師から記述データを得て分類を行っており、「友人関係」については「小規模校出身者は肩身が狭い」「友人関係をきずくのが苦手」「小学校からのいじめを引きずる」等、「教師との関係」では「接し方が難しい」「小・中教師の違い」等、「学業」については「内容が難しい・進度が速い」「基礎学力・学ぶ習慣不足」「定期テスト等システムに不慣れ」等、「部活動」については「先輩との上下関係」「練習の厳しさ」「勉強との両立」等、「その他」については「校則の細かさ・厳しさ」「日課にゆとりがない」「小中指導に一貫性がない」等、といったように指導や支援において着眼点となりうる具体的な事項をある程度示した。しかしながらあくまでも教師の視点から捉えた事象であり、分類の手法も明らかではない。

そこで本研究では、あらためて中学校進学前の不安について、小学校6年生を対象とした調査を実施し、そこで得られた記述データを基にテキストマイニングによる分析を行い、その構造を明らかにする研究を計画した。また併せて、実際に中学校に進学した時点から回想したときに、進学前の不安がどのようなものとして感じられるのか、その点についても明らかにすることとした。これらにより、小学生の中学校進学前の不安の構造と推移の一端を捉え、理解と指導、支援への示唆を得ることを目的とする。

方法

調査協力者 A市の公立小学校のうち協力が得られた2校の6年生138名、および公立中学校のうち協力が得られた4校の1年生327名。

手続きと倫理的配慮 本研究はA市の諮問会議に

おいて倫理的問題がないことが確認され、その責任下で調査が行われた。

調査協力者には、無記名の質問紙を配布し、記述内容と個人とが特定されることはないこと、回答は任意であり、回答の有無や中断、記述した内容によって個人に不利益が生じることは一切ないことを書面で説明し、かつ、実施時に学級担任より口頭でも説明した。

調査内容 以下の教示による記述を求めた。

小学校6年生 中学校に行ったら、「こういうことが心配だ」と思うようなことはありますか。心配していることを5つ書いてください。

中学校1年生 入学前に、中学校について心配に思っていたことを5つ書いて下さい。

分析方法 得られた記述データの分析には、樋口(2004)が作製・公開している計量テキスト分析ソフトウェア KH Coder 3 (Ver3. Beta.05)を使用した。記述データをマイクロソフトエクセルシートの各行に1回答者分ずつ入力し、データファイルを作成した。その際に、「べんきょう」などの平仮名表記や「勉強」などの漢字平仮名混合表記を「勉強」のように漢字表記に揃える処理、ならびに「他の小学校」「○○小学校(固有名詞)」のような同一内容の表現を「違う小学校」という同一語に揃える処理を行った。小学校6年生と中学校1年生の2つのデータファイルそれぞれについて KH Coder を用いて前処理を実行し、頻出語を抽出し、それらの語の共起関係を探った。前処理の段階で、強制抽出の対象として小学校6年生のデータでは、「違う小学校／ついていけるか／出来るか」の3語を指定し、中学1年生のデータでは「違う小学校／ついていけるか／出来るか／なじめるか」の4語を指定した。これらの語は予備的分析の結果、語の抽出において、重要な語とみられるにもかかわらず、「違う」「小学校」のように分解されたり、「つく」「いける」のように分解されかつ肯定の活用形で抽出されたりしてうまく検出できなかったものである。本研究ではこの結果を基に、共起ネットワークの描画による分析を行う。

結果

小学校6年生が感じた進学前の不安

小学校6年生の進学前の不安に関する頻出語がどのように結びついているかを探るために、KH Coderの「共起ネットワーク」コマンドを用いて出現パターンの似通った語(共起の程度が強い語と捉える)を線で

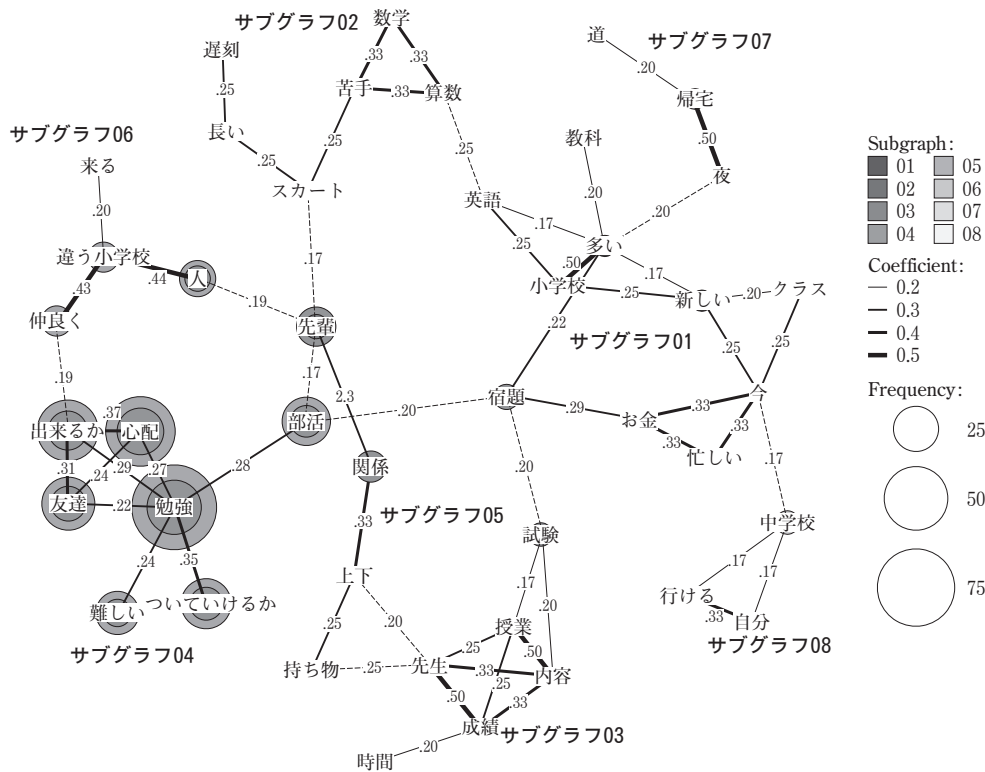


Figure 1 小学校6年生の進学前不安に関する頻出語の共起ネットワーク

結んだネットワーク図を作成し、語と語のつながりを可視化した。

分析では最小出現数を2、描画数（描画する共起関係の絞り込み数）を60に設定した。その結果 Figure 1 のような共起ネットワークが検出された。樋口 (2014) によると、共起ネットワーク図は、描画された語 (node) をつなぐ線 (edge) の太さは、線が太いほど相互に関連が強いことを示している。線上の数値 (Jaccard 係数) は、node と node の共起性の高さを示しており、数値が高いほど共起関係が強い。円は円周が大きいほど、その node が出現する頻度が高いことを示している。色の濃淡は、ネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割の node であるかを示しており、濃いほどに中心性が高い。本研究では、43の node、59の edge が検出された。また、modularity を指標として8のサブグラフが検出された。

まず注目されるのは、例えば「勉強」に関する node が同一のサブグラフに属するのではないという点である。

サブグラフ04では、出現頻度が高いため、円周が大きい「心配」「出来るか」「難しい」「ついていけるか」と「勉強」が強く共起しているが、node と edge の数が多く、より詳細な言葉を用いて表現されている（密度が高い）サブグラフ01には「教科」「英語」「宿題」

が、サブグラフ02には「数学」「算数」が、サブグラフ03には「授業」「試験」「成績」が、それぞれみられる。

すなわち8つ見出されたサブグラフは必ずしも事項の分野やジャンルを表してはいない。共起の強さと密度の高さから検出されたサブグラフというものは、今回の分析においては同一の回答者によって列挙された度合にしたがうものとして設定したものだからである。分野やジャンルの異なるものを同時に意識して記述したことを考察せねばならないであろう。

そのようにしてあらためて見てみると、サブグラフ01は「小学校」の語を中心に、進学後に新しくなる学習の内容や生活の具体的な様子を、今の小学校生活と比べて想像することで感じる不安であろうと解される。サブグラフ02は小学生である現在「苦手」な具体的事項を意識しての不安、サブグラフ03は中学校で本格化する学習への評価や学習の形式・構造面の変化への不安とみることができる。サブグラフ04は出現数としては他を圧しており、「勉強」「友達」「部活」といったことに「ついていけるか」「出来るか」と「心配」する内容である。おそらくこれらは進学を意識してクラスメイトや家族、あるいは教師と進学について会話するときの、いわば「定番」の話題ということではなかろうか。サブグラフ05は先輩との上下関係に関する

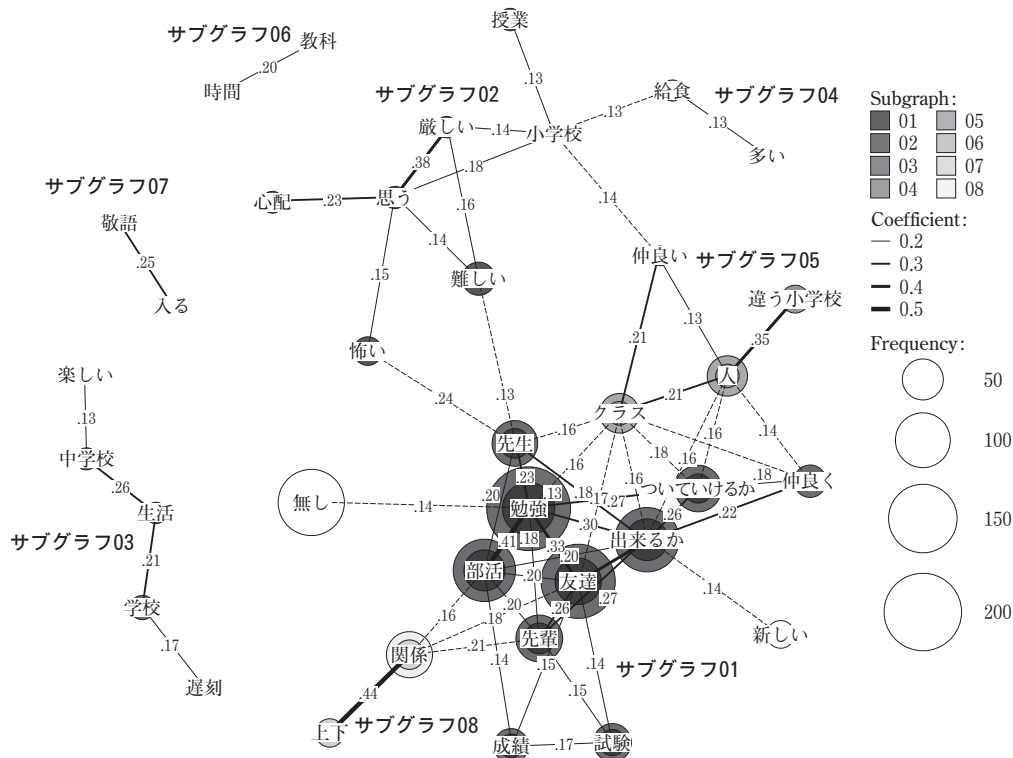


Figure 2 中学校1年生が回想した進学前不安に関する頻出語の共起ネットワーク

る不安が主体である。サブグラフ06は違う小学校から進学してくる同級生と仲良くできるかどうかという不安であり、サブグラフ07は帰宅時刻が遅くなり、夜道を歩かねばならなくなることへの不安である。そしてサブグラフ08は自分を意識するときには中学校でやっていけるだろうかという、漠然とした自意識の高まりによる不安であるとみられる。

中学校1年生が回想した進学前の不安

中学校1年生の頻出語の結びつきについて、小学校6年生と同じく KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを用いて語と語のつながりを可視化した。分析では最小出現数を3、描画数を60に設定した。その結果、Figure 2の共起ネットワークを検出した。36のnode, 62のedge, および8のサブグラフを検出した。

まず注目されるのは「無し」という語の高頻度での出現である。記述を文字通りに読めば「思い返せば不安はなかった」ということではあるが、実際に小学校6年生の時点で不安がなかったということではないであろう。多くの中学校1年生にとって、それなりに適応して学校生活をおくることができている今の時点から回想すると特段記述することはない、ということであると考えられ、そのような生徒が「無し」と書くのは自然なことであると言えよう。

サブグラフ01は小学校6年生の進学前の不安に関す

る「定番の話題」に該当する語を中心に高い係数で共起しており、6年生のサブグラフ03の主要なもの(「先生」「成績」「試験」)をも包含した。サブグラフ02は6年生のサブグラフ01と似た構造であるが、具体的内容よりも「難しい」「怖い」「厳しい」といった心理的印象が中心となっている。サブグラフ03は6年生にはみられなかったものであり、進学した今の時点から振り返った時、中学校生活が楽しいものになるだろうか心配していたことを回想している。6年生のサブグラフ02に属していた「遅刻」はここに属することとなっている。サブグラフ04は「給食が多い」ことへの不安であるが、やはり6年生にはみられなかった。サブグラフ05は6年生のサブグラフ06と重なるが、「違う小学校から進学してきた同じクラスの人と仲良くできるか」という心配に加えて「小学生の時に仲良くしていた同級生と同じクラスになれるかどうか」がより心配であったという内容が主となっている。サブグラフ06, 07も6年生にはみられなかったものであり、それぞれ「教科が増えて勉強時間も増えること」「中学校や部活動などに入ることで敬語を上手く使わねばならなくなること」への不安であるとみられる。サブグラフ08は6年生のサブグラフ05のうち、中学校1年生のサブグラフ01の「定番」の語との係数が若干低かったので分かれてはいるものの、「上下関係」というこ

とでサブグラフ01の複数の語と共起しており、そのネットワークに従属しているとみてよいであろう。

考察

以上からまず考えられることは、小学校6年生の時点で進学にともなう不安として頻出する言葉が、全て必ずしも深刻な内容であるとは限らないということであろう。

勉強、友達、部活動といったことについての心配を盛んに表現したり意識したりしていたとしても、実際に進学してしまえば多くの生徒たちが適応することができ、心配していたほどではなかったと感じられるものようである。当然と言えば当然のことであり、そうだからこそ学校での日々が成り立っているのであろう。進学前に別個に心配していた学習の形式・構造・評価などの変化や先輩との上下関係などもひとまとまりの生活実感の中に統合されることが多いようである。

他方で違う小学校から進学してきた同級生との関係性への不安については、進学後の回想でも高頻度で出現している。進学後の回想には現在の生活実感が投射されているからこそ回想されやすいという可能性があり、他校出身者との関係性は進学後も課題として実際に直面することなのであろう。そして小学校で仲の良かった友人と違うクラスになってしまうことによる不安は、進学前に思っていた以上のものであったとみることもできる。学校生活においてクラスは基本的な居場所であり、そこにおける対人関係は適応感を左右し、あらゆる活動のパフォーマンスにも影響を与え得る。中学校では教科担任制となり、教師との関係性よりもクラスメイトとの関係性の方が大きな比重を占めるようになる。そのような場に、小学校からの仲の良い友人がいるかどうかということのもつ影響の大きさは、進学後に実感として大きく感じられるのであろう。授業ごとに教師が変わり、教授スタイルや授業進行のルールなども時間割にしたがって変化する複雑な学習環境において、自分の行動判断の適否についてクラスメイトを参照することが大幅に増える中で、その場に小学校からの仲の良い友人がいることによる安心感は大きいであろう。これらの点からまずは、中学校進学前後において、他校出身者との関係性で問題をかかえていないかという視点が指導や支援において重要であると言えよう。また小学校において行動を判断したり律したりすることを、個人として行うことができる力を養っておき、小学校からの仲の良い友人がクラスに

いなくても、不安なく自己判断ができるようにしておくことも重要かもしれない。

小学校と比較するとき、進学前に具体的に不安に思っていた事項が思ったほどでもなく、むしろ中学校の雰囲気として「厳しい」「怖い」「難しい」と感じていることについては、前述したことと重なるが、小学校段階である程度自我の強さ、個としての強さを養っておく必要があり、中学校側は教師の口調や態度などが過度に高圧的になっていないか、また脅威や恐怖だけを感じている生徒はいないかという点をチェックして修正するような配慮があるとよいであろう。

遅刻しないようにすることへの進学前の苦手感は、進学後には楽しい学校生活の足を引っ張ることとして感じられる可能性があり、遅刻傾向のある児童については、小学校段階でその要因を明らかにし、克服できるようにしておくといえよう。

給食が多い、教科が増えて勉強時間も増えた、新たな場で敬語をうまく使わないといけない、といった、進学してみても実感した色合いが強いと考えられる事項は、頻度こそ多くはないものの、非常に具体的であり、小学校段階での準備や習慣づけが有効だったり、進学後の配慮が必要となったりするであろう。

このように、小学校段階での心配が、実際にはそれほどでもなかったと解することができるような結果も得られた一方で、具体的な要配慮事項や小学校段階での克服が望ましい事項も見出された。

また、本研究は縦断的にとったデータによるものではないという点には注意を要する。小学校6年生でみられた数学や英語、またスカートへの苦手感、帰宅が遅くなり夜道を歩かねばならなくなる不安感、あるいは漠然とした自意識による不安感などが中学校1年生には見出されなかったからといって、克服されたというような意味にはならない。むしろ、より細やかな理解と配慮が必要となる不安事項とみるべきであり、数学や英語については学力や認知発達や生活環境等、スカートについては性的多様性等、夜道の帰宅については犯罪被害等といった視点からの個々人に即した理解と配慮、そして支援が欠かせない。漠然とした自意識による不安にも寄り添う必要がある。心配を心配として表現した以上は、できる限り進学するまで丁寧に対話し対処を共に考えるべきであろうし、進学先の中学校に申し送っておくことも必要であろう。申し送りを受けた中学校側が注視して配慮するべきであることは言うまでもない。

同様に、「勉強についていけるか」「友達ができるか」

「部活動の先輩との上下関係をうまくこなせるか」といった、いわば「定番」の心配事を同級生と共有して語り合っているならば、さほど心配することはなからうということにもならない。多数の中に埋もれる形で実際に進学後に「ついていけない」「こなせない」などの形での困惑やつまずきが蓄積して不適応状態になることも考えられる。「定番」として意識されているならば、より組織的な予防的支援があるとよいであろう。

以上のように、中学校進学前の不安について、進学前の小学校6年生と、進学後の中学校1年生との記述データの分析を比較することで、指導や支援の指針となる事項を得ることができた。テキストマイニングによる記述データの分析を用いたことで、定量的測定を目的とした南ら(2011)や千島ら(2019)のような方法では得られなかった事項を見出した一方で、富家ら(2009)や中村ら(2016)の方法では見出せなかった具体的事項の相互関連性を捉えることができた。中学校進学前後の相互関連性を比較検討し、小中学校それぞれにおける指導や支援への提言を行うこともできた。

では、子どもたち自身は進学前あるいは進学後に、それらの不安にどのように対処しているのであろうか。指導や支援で重要なのは、対処主体としての子どもたちが育っていくことである。その際の着眼点を得るために、子どもたち自身が考えたり行ったりした進学前の不安への対処に関するデータの分析を、本研究に続けて行っていきたい。

引用文献

- 千島雄太・茂呂輝夫(2019). 小中連携による集団宿泊活動が中学校生活への期待と不安に及ぼす効果：不登校傾向に着目して 発達心理学研究, 30(2), 74-85.
- 樋口耕一(2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, 19, 101-115.
- 樋口耕一(2014). 社会調査のためのテキスト分析 ナカニシヤ出版.
- 門原眞佐子・高木亮・上森宏樹(2020). 体験活動を通じた小中連携による中1ギャップ予防プログラムの報告—異年齢間ピアサポート活動「中学生と語る会」が小6にもたらず効果検証— 就実教育実践研究, 13, 49-57.
- 小泉令三(1995). 中学校入学時の子どもの期待・不安と適応 教育心理学研究, 43, 58-67.
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2016). 「中1ギャップ」の真実 生徒指導リーフ, Leaf.15
- 草野剛・上地安昭(2002). 小学校から中学校への移行期における児童・生徒の期待と不安に関する調査研究 生徒指導研究, 14, 49-63.
- 松下理央・今城周造(2016). 小学校高学年における友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 18, 55-69.
- 中村仁志・太田友子・丹佳子・福田奈未(2016). 「中1ギャップ」における問題と背景—小学校から中学校への接続における生徒の困り感について— 山口県立大学看護栄養学部紀要, 9, 87-92.
- 南雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村淳(2011). 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究 教育心理学研究, 59, 144-154.
- 佐々木聡(2014). 女子中学校における新入生宿泊行事の実践研究—期待と予期不安に注目して— 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 778.
- 佐藤憲夫(2017). 学校不適応(中1ギャップ)解消に向けての小中学校連携の試み 名寄市立大学社会福祉学科研究紀要, 7, 1-11.
- 澤田俊和・古川雅文(1996). 中学校への環境移行における学校適応感と期待・不安・目的意識に関する研究 生徒指導研究, 7, 70-88.
- 富家美那子・宮前淳子(2009). 教師の視点から見た忠一ギャップに関する研究 香川大学教育実践総合研究, 18, 89-101.